バプテスト「平和宣言」の意義と問題点

片　山　　寛

「平和に関する信仰的宣言【平和宣言】」は，2002年11月15日，日本バプテスト連盟第49回定期総会で採択され，宣言されました。その後３年を経て，この宣言は次第に多くの人々の目と心に触れ，またその内容について議論がなされてきたように思います。この論文は，この「平和宣言」を神学的にどのように位置づけるべきかについての，現時点での小さな評価の試みです。

１.「平和宣言」の現代的意義

(1) 人々からの評価

「平和宣言」は多くの人々から評価されています。日本基督教団，聖公会，カトリックなどの人々から，この宣言は素晴らしいし，またそれを一つの教派として決議することのできたバプテスト連盟は素晴らしい，という声を聞くことがあります。私は，自分自身はこの平和宣言の成立には全く関わることがなかったのですが，バプテストの一人として，大いに誇らしく思っています。

「平和宣言」は，単にバプテストの群れの成果というだけではない，優れた意味を持っているように思うのです。私たちはともかくも，この宣言を連盟総会で採択することができたことを，喜んでよいと思います。しかしまた，人々から評価されたからと言って，手放しで喜べるような性質のものではないことも確かであります。なぜなら，平和宣言の価値というものは，その宣言が多くの人々から評価されたからよいというようなものではなく，その平和宣言がどのように平和を作り出すキリスト者の歩みに寄与できるのか，そ

して実際にこの世界の平和を実現できるかどうかに，すべてがかかっているからです。

以下では，先ず私たちの信仰告白としての平和宣言をどのような規準から評価すべきか，またどの点で評価されるかという基本線を述べた上で，今回の平和宣言の文言について述べてみたいと思います。そのさい，私は特に歴史神学，特に教理史の専門家でありますので，主に神学と教会の歴史を振り返る中で，「平和宣言」の評価を試みてみたいと思います。

(2) 日本バプテスト連盟の歴史の中で

「平和宣言」は，日本バプテスト連盟の歴史の中で生み出された重要な宣言であります。それは「反ヤスクニ宣言」(1982年)，「戦争責任に関する信仰宣言」(1988年) の延長上にあって，しかもそれをもう一歩前にすすめたものだと思われるのです。どの点で平和宣言がこれまでよりもう一歩進んでいるかについて，二つのことを述べておきたいと思います。

① 「反ヤスクニ宣言」，「戦争責任に関する宣言」が，全体としては，ヤスクニ神社や戦争などに対する「否」という，否定の響きの濃い宣言だったのに対して，平和を求めるこの宣言には，根源的にポジティブな響きがあるし，それがあるはずです。もちろん，これまでの二つの宣言も，キリスト告白を中心として，その告白の上に立ってヤスクニ神社に反対し，天皇の代替わりを機として強まり来る天皇制国家に反対していました。ですからこれまでも，単にネガティブな「反対声明」だったわけではないのですが，しかし今回のこの「平和宣言」は，その表題そのものからしてすでに，「反ヤスクニ宣言」や「戦争責任宣言」ではなく，「平和への宣言」であります。

もっとも，この宣言の正式名称「平和に関する信仰的宣言」というのは，その点で少し弱いように思われます。むしろ私たちは「平和を求める信仰的宣言」と言うべきではないでしょうか。この宣言は平和に「関して」論じているのではなく，平和を信じ，平和をつくりだすために宣言されているからです。平和は，宣言そのものの目的であり導きです。この点で「戦争責任に関して」宣言がなされるのとは異なります。後に述べますが，こうした細かい言葉遣いの点では，「平和宣言」には不十分な点があります。

② 第二に，今回の「平和宣言」は，これまでの二つの宣言よりも，過去と未来に向かって更に遠くを見すえつつ，宣言がなされています。すなわちここでは，イスラエルに与えられた神の戒め，「十戒」を振り返りつつ，キリスト者の生の全領域に関わることがらとして，平和が終末論的に宣言されています。そしてこれまでの二つの宣言が，基本的には日本の国内問題に関わる宣言であったのに対して，「平和宣言」は，よりグローバル化した世界において，世界に向けて発信された宣言です。

時間的にのみならず，空間的にも，平和宣言はより遠くを見つめつつ，より遠くまで声を届かせつつ発せられた宣言です。つまり，端的に言って，この宣言はこれまでよりもより総括的な信仰宣言であると言えます。この世界は，これまでの二つの宣言の時代よりも，より暗闇と混迷が深くなっているのですが，逆に，といいますか，それゆえにこそ，といいますか，「平和宣言」はもっと遠くもっと深い射程を持った宣言なのです。

1982年（反ヤスクニ宣言），1988年（戦責宣言）という両年は，イラン・イラク戦争1980－88年の中にありました。それはアメリカとソ連という二つの大きな勢力が並び立って，そのバランスの中で，世界各地で代理戦争が行われるという，冷戦時代の最後の戦争だったのです。イラン・イラク戦争の当時，イラクのサダム・フセインはアメリカの莫大な後押しを受けて，あの泥沼のような戦争を遂行したのでした。またほぼ同じ時期に，ソ連はアフガニスタンへの介入1969－89を終えて，撤退しました。

それは米国のレーガン政権1981－89年の時代であり，ソ連ではブレジネフが1982年に亡くなり，アンドロポフ，チェルネンコの短い時代を経て，ゴルバチョフが登場する（1985－1991年）時代でありました。

それに対して，今回の宣言は，ソ連の崩壊（1991）後，唯一の超大国となったアメリカが，湾岸戦争（1991年）を経て，世界への覇権を確立するかのように見えながら，その後次々と起こってくる地域の内戦やテロリズムにはほとんど対処できない（ユーゴスラヴィア内戦1991－96，コソボ戦争1998）ことが明らかとなった，現代という時代に宣言されました。それは直接的には，

2001年９月11日の同時多発テロ以後，アフガニスタン，そしてイラクと，アメリカの石油業界の主導の下に戦争が引き起こされる状況，この「平和宣言」前文の言葉を借りれば，「殺戮と報復が果てしなく繰り返され，絶望が支配しようとしている」時代に，つまり，より暗くなった世界の中で，この宣言は発せられたのです。

この点に，「平和宣言」の新しさがあります。いわばこの宣言は，暗闇の中に灯されたひとつの小さなロウソクのように，私たちの前に提出されたのであります。

２．「平和宣言」に対する批判と，それへの反論――「宣言」を評価するための基準

(1) 十戒に基づく平和宣言

これまで，人々からの賛辞や，「平和宣言」の新しさなどを述べてきましたが，これまでにもこの宣言に対していくつかの批判が寄せられてきたことも事実です。細かい各条項に関する非難や誤解は別にして，私はそれらの批判の中で最も重要な批判，つまり神学的に問題にすべき批判は，次の二つにまとめられると思います。

ひとつは，平和宣言が基本的に旧約聖書の十戒（Ex. 20, 1-17 ; Deut. 5, 1-21）に基づいて，十戒をベースにして書かれているという点です。この点に，確かにこの宣言の神学的な新しさがあり，また神学史的に問題とすべき点もあります。

従来の教会では，こういった旧約聖書の文言に基づき，しかもそれを中心に据えて信仰告白がなされるということはありませんでしたし，教理史を学んでいる私の信ずるところでは，おそらく従来はありえないことだったと思います。旧約聖書と新約聖書の関係を，律法と福音という二項対立で見る見方が，２世紀にユダヤ教とキリスト教がはっきり分離して以来，つい最近に至るまで，つまりキリスト教の歴史のほとんどの間，支配的であったからです。旧約と新約という言葉，つまり旧い契約と新しい契約という言葉そのものが，この見方を裏書きしています。旧い契約，つまりイスラエルと神との契約は，廃棄されたとは言わないまでも，新しい契約によって乗り越えられたのだと考えられたのです。最近になって，このような教会の歴史に対して，つまりキリスト教の歴史に骨がらみのようにまつわりついている反ユダヤ主義，アンチ・セミティズムの残滓に対して反省や批判がなされるようになりましたが，それもまだ全教会的なものとなってはおりません。

つまりこの平和宣言は，ある意味で２世紀以来のキリスト教の，少なくとも1900年の歴史に対して，それを批判するような形で出されているのであり，３年前の11月にバプテスト連盟の定期総会でこの宣言を決議した人々は，どこまでそのことの重大さを認識していたのかについて，疑問が残るのです。

従来の教会でも，旧約聖書を単に否定したわけでは決してありませんでした。旧約を単純に否定した，たとえばグノーシスやマルキオン派などの見方に対して，紀元２，３世紀の教会は，はっきりと旧約聖書を聖書として受けいれる立場をとっています。キリスト教は，旧約聖書とその教えを肯定しました。しかし同時に彼らは，旧約聖書の教えを，ある意味で不完全な教えだと考えたのです。新約聖書とその中心にあるイエス・キリストの教えこそ，完全な教えだとして，そこから旧約の歴史を積極的に解釈し，評価するということが従来の神学の基本線であったわけです。つまり旧約聖書の教えを，新約聖書の真理に照らして読み替えること（例えば「イスラエル→教会」，「アダム＝キリストの予型」など），それが長い間，神学という営みの中心でありました。

ですから，信仰告白や信仰宣言のような，自分たちの信仰の内容を短い言葉で言い表す場合には，旧約聖書を引用することはありましても（旧約と新約は対応するものと考えられましたから，新約聖書の言葉とセットになった引用は当然ありえます），基本的には新約聖書の言葉に基づくということが当然のこととされてきたのです。宗教改革の後も，この点では全く変わりませんでしたし，むしろ律法主義の批判において，この傾向はより強まったとさえ言えます。

つまり「平和宣言」は，教理史的な観点から見るならば，多分に先取り的な神学宣言であって，教会で十分な議論が尽くされた上で採択されたとはと

ても思えないような，ある意味で将来的な宣言であるわけです。この点で，「平和宣言」は，私たちのバプテスト連盟の中で，その内容をまだこれからずっと議論していかねばならない，そして本当にこの宣言の趣旨に基づいて教会づくりをし，この宣言の趣旨に立って教会が歩んでいけるのかどうかを，将来に向かって確認していかねばならない内容を備えているということになります。

私自身はしかし，この十戒をベースにした宣言であることについて，二つの点で肯定したいと思います。ひとつは，それがカール・バルトとディートリヒ・ボンヘッファーの神学の方向に沿っているということです。細かい議論は避けますが，バルトとボンヘッファーの神学は，確かにこの，大きな意味でのキリスト教の反ユダヤ主義の克服という線上にあります。それは基本的に正しい方向です。

もうひとつは，それは今日的状況において，ひとつの予見的な意味を持つと考えるからです。今日の世界の状況において，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教の和解という課題は，環境問題と並んで（環境問題もまさに神学的な問題だと私は考えます），最も大きな信仰の問題だと思います。それは，私たちキリスト教徒のみならず，人類がこれからも生きてゆけるのか，また生きていってよいのか，という問題と直結しています。ユダヤ教，キリスト教，イスラム教が共通の源泉とし，自らの故郷として大事にしている旧約聖書の十戒に基づく平和の訴えは，私たちバプテストに大きな励ましと勇気を与え，宗教間の対話をすすめてゆくための最初のステップとなるのではないでしょうか。

(2) 日本バプテスト連盟の小ささ

もうひとつの神学的に重要な批判は，私たちの小ささです。日本の人口の１％のクリスチャンの，そのまた数パーセントに過ぎない日本バプテスト連盟は，非常に気宇壮大な，世界に向けての平和宣言を出したわけですが，そのこと自体が何か滑稽なことではないのか，という批判が存在します。たとえば1934年のバルメン宣言は，まがりなりにもドイツの福音主義教会の代表者たちが集まった告白会議によって宣言されました。最近ハインツ・エドゥアルト・テート Heinz Eduard Toedt の『ヒトラー政権の共犯者，犠牲者，反対者』というすぐれた本が日本でも出版されましたが，その中でも述べられておりますように，ドイツ教会闘争というものは，確かに第二次大戦を押しとどめる力はありませんでしたし，あれほどの大虐殺と多くの人々の苦しみを防ぐことはできなかったのですが，しかしそれは決して無力な戦いではなかったのです。ヒトラーとナチズムにとって，1934年の時点での教会闘争は，彼らが震え上がり，教会対策に頭を悩ませ，弾圧と懐柔に向かわせるだけの大きな影響を持った政治的事件でありました。

それに対して，私たちの平和宣言が，日本の政治家たちの政策に何か影響を与えたかというと，それはほとんど皆無だと言ってもよいのではないでしょうか。2002年から後，教会に対する警察の弾圧とか迫害が始まったでしょうか。政治家たちの発言の中に，この宣言に対する反論とか弁明とかが見られたでしょうか。いや，私たちの宣言は残念ながら何の問題にもなりませんでしたし，単に無視されただけに終わりました。先頃の選挙で自民党はヒトラーのナチスも達成したことがないような歴史的な大勝利を収め（1933年３月５日の国会選挙，つまり戦前で最後の選挙においてさえ，ナチス党が獲得した議席は43.9パーセントであり，国家人民党と合わせて51.9パーセントという，過半数ぎりぎりの議席しか得られませんでした），憲法改正もありえないことではないような状況が，私たちの目の前にあります。

そのように考えると，「平和宣言」は，ごくプライヴェートな，数人から数十人の先鋭的な信仰者たちが計画して何とか出したというだけの，馬鹿馬鹿しいぐらい小さな出来事に過ぎないのではないか，とも思えるのであります。そういう「軽い」意味しかないような宣言だからこそ，つまりどちらにしても自分の信仰生活のすべてが問われるような重大問題ではないからこそ，第49回定期総会に集まったバプテスト教会の代議員たちは，大した反対もなく，この宣言を鷹揚に採択してくれたのではないか。「平和宣言」は格好だけは勇ましいけれども，中身はほとんどない「張子の虎」ではないか。このような，ある意味でもっともな疑問，もっともな批判に対して，私たちはど

のように考えればよいのでしょうか。これについて，私は次のように答えたいと思います。

(3) 信仰宣言を評価する基準

信仰の宣言というものを，その時点での直接的な社会的・政治的な影響力によってのみ計るのは間違いです。歴史上の多くの信仰告白や信仰宣言にしても，実際には，全教会の決然たる合意の下に採択されたわけではありませんでした。バルメン宣言にしても，仮にもし告白教会が本当にこの宣言の下に結集し，命がけで信仰の立場を守り抜くことができていたならば，テートが述べるように，歴史は変っていたはずなのです。戦後のカール・バルトのインタビューの言葉（in : *Gespräche 1963*, GA. IV, S. 345-348，天野有氏の試訳を参照した）も，そのことを語っています。バルメン宣言は，政治的宣言としては，敗北した宣言だったのです。

しかしそれでもなお，バルメン宣言が重要な宣言であったことには，変りありません。あの宣言によって，どれだけ多くの人々が，戦争中の苦しい時代に希望を持ち続けたことでしょうか。バルメンに結集した告白教会は，その後，ナチスの弾圧によってガタガタに崩されてしまいましたけれども，その告白教会の信仰告白に立ち続けて，ひそかにユダヤ人救援運動を続けたり，海外に亡命してドイツのために働いたり，あるいはヒトラーに対する抵抗運動を続けた人々（7月20日事件など）が数多くいたことも事実です。バルメン宣言は彼らを支え続ける希望であったのです。

私は，平和宣言は「暗闇の中に灯されたひとつのロウソクの光だ」と申しました。信仰宣言とは本来，そのようなものなのです。

信仰告白，信仰宣言の重要さは，その政治的影響力，政治的有効性によって計られるのではありません。歴史的に見るならば，ほとんどの信仰宣言や告白は，今から考えるとお話しにならないくらい小さなグループの中で，小さなグループの人々に向かって出されたのです。すでに聖書そのものが，そうです。パウロの手紙や福音書は，もともと小さな教会で小さな教会に向けて書かれた，ある意味でプライヴェートな文書でありました。信仰告白の重要さは，今がどうであるというよりも，それが将来に亙ってどのように用いられるかにかかっているのです。

宣言とは，ひとつの先取りであり，時代を超えた神の主権への預言的な呼び求めであります。宣言することは，その将来を預言し，それによってそれを招来するのです。

日本バプテスト連盟の小ささから言えば，平和宣言に大きな政治的な力はまだないと言わざるをえません。しかしこの宣言が本当に重要な力強い宣言であり，私たちの将来の先取りであるなら，それは時代を超えて実現するでありましょう。

そのような，ひとつの神学的な平和論が，新しい時代を切り開いた例として，私は教理史上の二つの文書を御紹介したいと思います。

(4) アウグスティヌス『神の国』(426年)

そのひとつは，アウグスティヌス354－430の『神の国』という書物です。この書物の特に第19巻は，地上の平和 pax Romana に対して「神の平和」を主張し，神の平和こそ地上の平和の根拠であり目標であることを述べた重要な文書です。すなわちアウグスティヌスは『神の国』19巻11章で，平和を，単に戦争がない状態というのではなく，永遠の生命と同様に，「われわれの諸々の善の目的」(fines bonorum nostrorum)であるとし，次のように述べます。

「平和の善はかくも大いなるものであるので，この世的で可滅的な事物に関する平和でさえも，これほどわたしたちの耳につねに好ましくひびくものはないし，これ以上に熱望されるものはない。つまりこれ以上に善きものは見出されえない nihil postremo possit melius inueniri のである。」(XIX, 11)

平和とは一見正反対にある戦争でさえも，実は平和を目的としている，とアウグスティヌスは言います。

「およそいかなる仕方であれ，人間的なことがらや人間共通の本性について見て取る者ならだれでも，わたしと共に認めるであろう。すなわち，喜びを望まない者はいないように，平和を得ることを望まない者はいないということである。戦争を欲する者でさえも，彼が欲しているのは勝利を得ること

に他ならないのであってみれば，彼は戦うことによって栄光ある平和に到達することを切望しているのである。……それゆえ，戦争の求める目的は平和であると言えよう Vnde pacem constat belli esse optabilem finem。」(XIX, 12)

平和は，戦争のみならず，地上のすべての営みの目的・終極 finis だとされます。そしてすべての平和は，秩序 ordo が確立され，静けさ・安息が訪れることだとされるのです。

「物体の平和とは諸部分が秩序づけられた調和であり，非理性的魂の平和とは諸欲求が秩序づけられた平安 requies であり，理性的魂の平和とは認識と行為が秩序づけられた一致である。すなわち身体と魂の平和は，生命が秩序づけられることであり，生きものの健康であるが，死すべき人間と神の間の平和は，信仰において永遠法の下で秩序づけられた従順のことであり，人間の間の平和は秩序づけられた和合である。すなわち家の平和とは共に住む者たちの命令と従順の秩序づけられた和合であり，国の平和 pax ciuitatis とは市民たちの命令と従順の秩序づけられた和合である。天国の平和は神を享受することと神においてお互いを享受することとの最も秩序づけられ最も和合された共同性 societas である。万物の平和は秩序の静けさ・安息 tranquillitas ordinis なのである。」(XIX, 13)

ここでアウグスティヌスは，すべての地上の平和に対して，その根拠であり目標であるものとして，更に究極的な「神の平和」,「天国の平和」を置いています。

「時間的事物の使用 usus はすべて，この世の国における地上的な平和の享受 fructus に関係づけられるが，天国においてはすべてが永遠の平和の享受に関係づけられる。」(XIX, 14)

ここで「使用」と「享受」という，アウグスティヌスの神学の中心概念が登場していますが，彼が言う「秩序」とは，力の強い者が弱い者を支配するということではなく，この「使用」と「享受」の間の秩序のことです。平和は「使用」のためにあるのではなく，「享受」すべきものとしてあるということ，そして地上における平和の享受は，さらに究極的な天国における平和の享受によって意味づけられるということです。この「使用」と「享受」の

秩序は同時に，神への愛，自己自身への愛，隣人への愛という三つの愛 dilectio の間の秩序でもあります。

「わたしたちの教師である神はすでに，二つの主要な掟，すなわち神への愛と隣人への愛を教えている（Mt. 22, 37）が，これらの掟には，人間が愛するべき三つの対象，つまり神，自己自身，そして隣人が見出される。かつまた神を愛する者は，自己自身を愛することにおいて誤らない。その結果として，人間は，自己自身のように愛せよと命ぜられているところの隣人が神を愛するようにと助けることにもなる。……またこれによって人間は，このこと（相互扶助）のうちにある限りにおいて，万人に対して，人間の平和つまり秩序づけられた和合 ordinata concordia により，平和的 pacatus であることであろう。この和合には次の秩序がある。すなわち第一には誰をも害しないこと，第二にできるときにはその人のためになることである。」(XIX,14)

平和は地上のあらゆる営みの目的であるということ，そしてそれはキリストの教えた愛の秩序でもあるということが述べられました。問題は，この地上の平和が，究極的な天国の平和とどのように関わっているのかということです。これについてアウグスティヌスは次のように言います。

「このように，信仰から生きていない地上の国でさえも地上的平和を切望しており，その切望において市民の間の命令と従順の和合・一致 concordia を定め，死すべき生に関わる事物について，彼らに，人間的な意志の何らかの合意 compositio が得られるようにしているのである。他方，天国，あるいはむしろ天国の部分であるところの，この死すべき世界で遍歴を続け，信仰によって生きている人々（教会）は，地上の平和を必要とする死すべき生そのものが過ぎ去ってしまうまでは，この平和をも使用することを必要としているのである。」(XIX, 17)

ここでは「天国」caelestis ciuitas という言葉が二様に使われています。すなわち神の国である天国そのものと，未だ地上にありながら神に従う人々の群れである教会です。教会は，いわば天国の地上における出先であり，天国の先取りです。ですから教会は，地上の平和と天国の平和との交点に位置づ

けられているのです。

「天国（教会）は唯一の神のみが崇拝されるべきであることを知っており，また，その神にのみ，ギリシア語でラトレイアと呼ばれ，神以外に捧げる必要のないあの礼拝・奉仕 seruitus によって仕えるべきであることを，信仰の敬虔をもって認めている。」（XIX, 17）

私がここで注目したいのは，平和の問題が，地上における教会の使命と固く結びついているということです。教会は，アウグスティヌスによれば，天上の平和の地上における先取りであり，そのような平和を自ら生きることにより，地上の平和を実現していくべきものなのです。

「それゆえにこの天国（教会）は，地上で遍歴を続けている間は，あらゆる民族からその市民を呼び出し，あらゆる言語において遍歴している共同体を集めるのである。それ（天国）は，地上の平和がそれによって獲得され保持されているところの慣習や法や制度がいかに異なっていても意に介せず，それらのうちの何ひとつ廃止したり破壊することもなく，むしろそれらに仕え，それらに従いさえするのである。すなわち，民族にはそれぞれ相違があるとはいえ，もしそれが，唯一で最高の真の神が崇拝されるべきであることを教える信仰 religio を妨害することがなければ，そこでは地上の平和の唯一の同じ目的が意図されているからである。」（XIX, 17）

教会は，地上の権力を相対化します。かといって，地上の制度や法を無視するのではなく，むしろそれらすべての目的であるところの平和を指し示すのです。ですから，天国と地上の権力の間にあって教会は，「使用」と「享受」の間の秩序を自ら体現し生きるのです。

「それゆえ，地上において遍歴をつづける天国（教会）も地上の平和を使用するのであり，また，人間の死すべき本性に属するもろもろの事柄については，それらが健全な敬虔と信仰によってゆるされるかぎり，人間の意志の合意を擁護し切望し，この地上的平和を天国の平和へと関係づける。この天国の平和こそ，少なくとも理性的被造物の持つべきただひとつの平和であり，ただひとつ平和と呼ばれるべきものであるという意味で，真の平和である。すなわち神を享受し，神において互いを享受するという，最も秩序づけられ

最も和合された共同性なのである。」（XIX, 17）

天国は，そのような究極の平和と，それを先取りする地上的形態（教会）という二重の形態で——終末論的に——存在します。平和の実現は，地上ではまだ全面的に見ることはできないとしても，教会がその倫理的行為をそれに関係づけるときに，おぼろげにではあったとしても見えてくるのです。

「天国（教会）はこの平和を，遍歴を続ける間は信仰において有し，またこの信仰からして平和を正しく生きる。それ（平和を正しく生きること）は，神と隣人に対して実行すべき（愛の）善行のひとつひとつをあの平和の獲得に関係づけるときに起こる。国の生はいずれにしても共同的 socialis であるからである。」（XIX, 17）

この書物が書かれた426年という日付に注目したいと思います。395年に，テオドシウス大帝が死去します。彼はキリスト教を正式にローマ帝国の国教と定めた皇帝でしたが，すでに彼の治世の時期に，ゲルマン民族の西方への大量移動が始まっていました。彼の死後，ローマ帝国は再び分裂し弱体化していきます。410年には帝都ローマが西ゴート族によって占領され，実質的には西ローマ帝国ではゲルマン民族の支配が始まっています。アウグスティヌスが住んでいた北アフリカでも，427年にヴァンダル族が侵入してヴァンダル王国を建設します。430年に，アウグスティヌスはヒッポ・レギウスという町の司教として死ぬのですが，そのとき，ヒッポの町はヴァンダル族に包囲されており，アウグスティヌスの死後間もなく，占領されています。つまりこの『神の国』という平和の書は，ローマ帝国の崩壊と，その後長く続く混乱の時代を目の前にして書かれたのです。しかしこの書は，長い時間を経て，中世の社会を予見し，準備するものとなりました。

(5) エラスムス『平和の訴え』（1517年）

もうひとつの例を，私はロッテルダムのエラスムスの書いた『平和の訴え』に見ます。エラスムスがこの小冊子を書いた1517年は，ルターの宗教改革が始まった同じ年です。キリスト教に従っていると称する人間たち，僧侶たちや，王侯・貴族たちの残虐さ，愚かさ，傲慢さを，エラスムスは道化を

装いながら徹底的に批判しています。平和とは寛容である，それがエラスムスの基本的な主張ですが，それは後から振り返ってみれば，滑稽なほどナイーヴな主張でありました。現実には，この後間もなく始まった宗教改革の嵐の中で，逆に争いは全ヨーロッパに広がり，多くの庶民を巻き込んで苦しみを撒き散らしながら，100年も続きます。しかし人文主義者 humanist としてのエラスムスの平和の訴えとその精神は，少数の人々に受け継がれ，やがて新しい時代を準備することになりました。

『平和の訴え』は特に神学的な著作とは言えないかもしれません。むしろここでエラスムスは異教の神である平和の女神（「平和」pax は女性名詞）の口を借りて，当時の教会とキリスト教社会を皮肉り，揶揄し，批判しているのですが，その中心には，キリスト教の教えの中心には生命を大切にし，平和を実現するということがあるはずだ，という強い確信があります。「旧約聖書にせよ新約聖書にせよ，聖典全体が語っていることは，ただひとえに平和と一致協力のことだけです。それなのに，キリスト教徒たちの生活全体は，ただもう戦争をやらかすということだけでいっぱいではありませんか？」（QP. 27）という嘆きに満ちた訴えは，この文書全体を貫いています。それは私たちの胸を打たないではいられません。宗教改革者の神学（たとえばルターやカルヴァンのそれ）は人文主義を乗り越えていた，というような言い方がされることがあるのですが，決してそうではなく，私たちは今でも，このエラスムスの問いの前に立たされているというべきなのです。『平和の訴え』には箕輪三郎の名訳がありますので，その一部を紹介します。エラスムスはそこで当時の情勢についても語っていますので，理解のための註をつけました。

32　人間の生命ほど脆（もろ）く，儚（はかな）いものがあるでしょうか？　それはまあ，なんと多くの病いと災難に曝（さら）されていることでしょう！　人間の生命には，本来堪（た）えることのできないほどのかずかずの不幸が生れ落ちた時から揃っているというのに，その上人間自身の狂おしさや愚かさがさらに多くの不幸を自ら招いているのです。この痴愚のために，人間の心の目はすっかり眩（くら）んでしまって，一寸先の不幸も見通すことができず，狂った向こう見ずの行動によって，一切の自然の絆とキリストの絆を断ち切り，協定という協定をみな破っています。彼らはこれといった節度も限界もなしに騒乱を起こし，ひっきりなしに，どこでもかしこでも戦争をしています。国と国が，都市と都市が，党派と党派が，そして君主と君主が，角（つの）を突き合っているのです。蜻蛉（かげろう）のように儚い命しかない小ざかしいたった二人の人間の愚かなふるまいと野望のために，人間本来の面目が本末転倒の混乱状態に落ちこんでいるのです。

33　ここでは，古い時代の戦争の悲劇のことにはふれないで，最近十年にわたって人間たちが何をしたかを振り返って見ましょう。人間が残虐極まりない方法で戦い合ったことのない陸地や海が，どこにあるでしょうか？　キリスト教徒の血に染まらなかった地方が，どこかにあるでしょうか？　いったい，どの川が，どの海原が，人間の血で染められなかったといえるでしょう？

なんという恥ずかしさ！　ユダヤ人よりも，異教徒よりも，野獣よりも，一まわりも二まわりも残虐な戦いをキリスト教徒がしているとは！　……

34　キリスト教を奉ずる君主たちが，どんな恥ずべき理由，どんな馬鹿げた理由によって，この世界を合戦に駆り立てているかを思うと，恥ずかしくて顔を赤らめずにはいられません。ある君主は，もう今となっては時代遅れの，すたれた権威を探しまわったり，でっち上げたりしています[1]。ただ民衆の利益だけを正しく管理すべきなのに，誰が王権を握るかということがいかにも大問題だとでもいうように！　また別の君主は，百ヵ条にもおよぶ重要事項を含む条約の中に，これこれのこと一つだけは記載されていないからという口実をかまえて戦争をしています。またある君主は，他の君主に対して，許婚者を拒絶されたとか奪われたとか，さては冗談の度が少々過ぎたとかいう個人的な理由で敵対しているというありさまです[2]。

(1) フランス王シャルル８世は，父親のルイ11世がアンジュー公家の後継者であり，そのアンジュー公家が昔ナポリ王国を支配していたという古い権威を口実にして，

1494年にイタリア遠征をした。シャルル８世の後継者ルイ12世も，祖母がミラノ公の娘であったことを口実にして，1499年にミラノ公国を占領した。

(2) シャルル８世はオーストリアのマクシミリアン１世の娘マルガレーテ（二歳）を許婚者にすることにより，アルトワ，ブルゴーニュなどを婚資として得た（1482年）が，1491年にブルターニュ大公妃アンヌと結婚して，西海岸一帯を支配下におさめた。マルガレーテはオーストリアに返されたが，婚資は返還されなかった。加えて，アンヌはマクシミリアン１世の名目上の妻だったので，オーストリアとフランスの間は険悪化した。

３．日本バプテスト連盟「平和に関する信仰的宣言」の弱点

以上，私は「平和宣言」に対する神学的な批判について，「平和宣言」を支持する立場からいくつか論評を加えてきました。とはいえ，私の立場からは，いくつかの弱点もまた，この平和宣言には含まれていると言わなければなりません。

(1) 平和とは何か

第一にこの宣言は，平和とは何か，という問いかけに十分答えているのか，という問題があります。平和が，単に人間の間に戦争がないということを超えた積極的な意味を持つとするならば，アウグスティヌスの述べたように，平和は第一義的に「神の平和」でなければならないと思われるのです。この点で，たとえば第４戒（安息日の戒め）について，この世に対する断念と礼拝の優先をだけ語ったのは，不十分であるように思います。安息とは，創造のわざを完成した神の平和そのものに倣うことです。十戒の安息日規定は，偶像礼拝を排し神のみを主とすることを命ずる第１～３戒と，生活共同体規定である第５～10戒とを結びつける，十戒全体の要です。その箇所で安息が命じられたことの意味は大きいのです。しかもこの安息日規定は，出エジプト記においては創造のわざの完成として，申命記においてはそれに加えてエジプトからの解放の記念として守るように，特に命じられているのです。つまりここで，十戒全体の根拠と意味がもう一度語りなおされているのです。安息日を生きるとは，神の平和を生きることでなければなりません。この点で，この世的な生に対する断念と，礼拝への参加の決意としてのみ安息日規定をとらえたことは，この宣言の神学的な弱さだと思うのです。

(2) どのような平和を求めるのか

第６戒「殺してはならない」とその解説において見られるように，平和を求めるということにおいて条件的・決疑論的な casuistic 語りを排したということは，高く評価されてよいと思います。「平和のために」と称して数々の戦争・迫害・略奪が正当化されてきた人間の罪責を考えるなら，平和を端的に主張することは正しい態度です。しかし「絶対的平和主義は非現実的な理想主義」だという反論に対して，真に有効に答えることができたのかは，問題が残ります。「平和宣言」で主張されているのは，本当は「絶対的平和主義」ではなく，むしろボンヘッファーの線，つまり政治的抵抗を可能性として含む平和主義だと思われるのですが，その点に不明瞭さが残ります。

これは非常に難しい問題ですが，ボンヘッファーと，たとえばカール・バルトの線における主張との間に横たわる微妙な違いについて，まだ十分に論じられていないように思われるのです。ボンヘッファーにおいて，彼自身が関わったヒトラー暗殺計画は，神の裁きを待つしかない罪であり，最後まで正当化できない事柄でありつづけました。にもかかわらずボンヘッファーは，それ以外に選択の余地はないと考えたのです。彼において平和を生きるとは，そのような矛盾を生きるということだったのです。しかしバルトにおいては，そのような主観的な罪の意識は，事柄の中心にはないと思います。バルトにおいて政治的抵抗は，平和を求めるキリスト者の行動に当然含まれます。その抵抗が時には軍事的な抵抗をも含み得るということは，たとえばバルトの「プラハのロマドカ教授への手紙」(1938) や「キリスト者の武器と武装」(1940) において明らかです。

(3) 宗教的原理主義に対して

第三に，宗教的原理主義に対する反論として，平和宣言は弱いように思います。世間一般には，原理主義に対して持ち出されるのは，宗教的相対主義

であり多元主義です。しかし実際には，原理主義と多元主義・相対主義は，近代というものが陥っている主観主義的誤りの二つの側面にすぎないのです。原理主義に対して相対主義を持ち出すのは，基本的な誤りであり，一般に原理主義と呼ばれるものは，実は相対主義と同根のご都合主義に過ぎないことが認識されなければなりません。

だとしても，「主イエスにのみ服従する」という同じ言葉から，原理主義者は全く逆の結論(「聖なる」戦争）を引き出しているのであり，それに対する明瞭な否が，宣言文においてのみならずその解説文でも語られていないことは，時代の問題として残念に思えるのです。私たちは，テロや戦争を肯定する宗教原理主義に対して，その反対の「平和原理主義」を持ち出そうとしているのではないのです。

以上，三つの点で，私はこの「平和宣言」にまだ不明瞭で不十分な点があるのではないか，と思います。それらは，「平和宣言」を否定するものでは決してありません。ある意味では「ないものねだり」のようなものです。むしろ私たちは「平和宣言」そのものの精神の深化と実践的適用の問題として，これらの内容を――他にも出てくるかもしれませんが――これから勝ち取っていかなければならないと私は考えるのです。

参考

平和に関する信仰的宣言【平和宣言】

前　文

「平和をつくりだす人たちは，さいわいである」と主イエスは言われる。しかし今，世界は敵意に満ちている。殺戮と報復が果てしなく繰り返され，絶望が支配しようとしている。

十字架の主イエスはこの世界において審きと和解を為し，解放と平和を告げ知らせ，私たちを復活のいのちへと導かれる。私たちは静まって沈黙し，主イエスの声に聴く。教会は救われた者の群れとして応答に生きる。

神は奴隷の地エジプトから人々を解放し，十戒を与え，救いの出来事に応答して生きることを命じた。主イエスは十字架と復活を通してこの律法を成就された。それゆえ私たちは十戒を死文と化してはならない。教会は十戒を生きる。

この世界の中で主のことばに従って平和を創り出していくために，日本バプテスト連盟に加盟する私たちは主の恵みに与りつつ，主の戒めに生きることを宣言する。

１．私たちは主イエスに従う

十字架の恵みを受けた私たちは主イエスに従う。信じる者は服従へと召され，主イエス以外のすべての束縛から解放される。主イエスへの服従こそが，私たちを自由にする。

第一戒　あなたはわたしのほかに，なにものをも神としてはならない。

私たちは主イエスの御顔をのみ仰ぎ見る。私たちは御声をのみ聴く。私たちは自らを誇ることをせず，十字架の主イエスを誇る。私たちは御心のままにと祈る。私たちは主イエス以外を知らない心貧しき者として生きる。私たちはこの生に平和を見出す。

２．私たちは主イエスのほか何ものにも服従しない。

主イエスへの服従はそのほか一切のものに対する服従の拒否である。不服従を伴わない服従はあり得ない。主に服従する私たちは自分自身にとって最も大切なものさえも断念する。

第二戒　あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。

国家，民族，イデオロギー，経済，富，宗教的政治的権威，自由と正義，道徳，良心，感情，感覚，生命，自分自身，そして愛する者たち。これら一切は，服従の対象ではない。私たちはこれらを神に仕立て上げ，これらにひれ伏し仕えることをしない。

第三戒　あなたはあなたの神，主の名を，みだりに唱えてはならない。

教会は神の御心を騙（かた）ってはならない。教会が神の名を利用して，暴力や報復，正義の戦いを肯定することは許されない。

第四戒　安息日を覚えてこれを聖とせよ。

礼拝をこの世と区別しないとき，服従してはならないものへの服従が始まる。礼拝は主イエスへの服従行為であり，この世に対する断念である。私たちは礼拝を第一とする。

3．主イエスに従う私たちは殺さない

主イエスによって解放され生かされた私たちは，もはや殺すことができない。もし殺すなら，私たちは服従してはならないものに服従するのであり，主の恵みを否定するのである。

主によって解放され生かされた私たちは，もはや赦すこと，愛すること，分かち合うこと，生かすことしか許されてはいない。教会はただそれらのことにおいて主に服従し，主の恵みを喜ぶ。

第五戒　あなたの父と母を敬え。

主イエスによって解放され生かされた私たちは，年老いて弱さの中におかれた者たちを尊ぶ。戦争の時代，生きる価値がないとされた者たちは殺される。私たちは彼らと共に生きることによって，戦争の価値観を拒否する。教会は戦争の役に立たない群れとして生きる。

第六戒　あなたは殺してはならない。

主イエスによって解放され生かされた私たちは，他者を殺しその存在を否定することができない。殺しのあるところに平和はない。私たちは殺さない。軍備のあるところに平和はない。私たちは殺すための備えを否定する。戦争に協力するところに平和はない。私たちは殺すことにつながる体制づくりに協力しない。暴力のあるところに平和はない。私たちは暴力の正当性を否定する。主に従う教会は敵を愛し，迫害する者のために祈る。

第七戒　あなたは姦淫してはならない。

主イエスによって解放され生かされた私たちは，姦淫することができない。姦淫は人が性的欲望を持って他者の尊厳を侮辱することである。戦争は姦淫を正当化する。姦淫のあるところに平和はない。私たちは姦淫をしない。教会は性の領域においても他者の尊厳を冒さない。

第八戒　あなたは盗んではならない。

主イエスによって解放され生かされた私たちは，盗むことができない。しかし神が造られたこの世界は，常に搾取と収奪にさらされ盗まれ続けている。搾取と収奪は一部の富める者と多くの貧しい者たちを生み出し，紛争の要因となっている。富める者は自らの権益を守るため戦争をする。搾取と収奪のあるところに平和はない。私たちは盗まない。教会は神が与えた恵みを分かち合う。

第九戒　あなたは隣人について偽証してはならない。

主イエスによって解放され生かされた私たちは，偽証することができない。偽証は自己保身と悪の正当化の手段である。歴史に対する偽証はアジアの隣人との和解を阻害してきた。偽証のあるところに平和はない。私たちは偽証をしない。主イエスの赦しを受けた私たちは，もはや保身のための偽証を必要としない。教会は罪をありのままに告白することによって隣人との和解を願う。

第十戒　あなたは隣人の家をむさぼってはならない。

主イエスによって解放され生かされた私たちは，むさぼることができない。一切を独占しようとする私たちのむさぼりが，隣人を傷つけ，世界を破壊し，戦争を引き起こしている。死者さえもむさぼられ戦争の道具とされる。むさぼりのあるところに平和はない。私たちはむさぼらない。国，力，栄え，一切は神のものである。教会は一切を神に捧げ，奉仕に生きる。

結　語

教会は戦争に協力した。私たちは十戒を守らなかった。さらに主イエスが十字架においてこの罪さえも赦し，応答に生きるために復活のいのちを与え給うたにもかかわらず，私たちはこの恵みを理解しなかった。赦された故に主の戒めを守る必要がないとさえ考えた。こうして私たちは主イエスの恵みを安価なものにしてしまった。そしてイエスは今日も十字架の上からそのような私たちを召しておられる。

極限状況は暴力とその正当化へと私たちを誘惑する。しかしたとえそれが愛する者を守るための暴力であっても，その暴力行為によって私たちは主イエスの十字架の下で審かれる。私たちは主の審きと赦しのもとで十戒を生きるしかない。

教会は主イエスに従う。教会は主イエス以外のものを断念する。教会は弱いものを尊ぶ。教会は殺さない。姦淫しない。盗まない。偽証をしない。むさぼらない。

主イエスの十字架の和解はすでに成し遂げられた。絶望の闇はこれに勝たなかった。私たちは復活のいのちに与り，平和を創り出す。主は世の終わりまでいつも私たちと共におられる。

終わりの日に，主は敵意と殺戮，報復と絶望を完全に終わらせ，苦しめられてきた者たちの目から涙を全く拭い去ってくださる。教会は主が来られる時に至るまで主の死を告げ知らせ，和解の福音を担い続ける。

主イエスよ，先立ちたまえ。伴いたまえ。我らを新たにしたまえ。聖霊なる神よ，我らをきよめ，平和の器となさせたまえ。父なる神よ，御国を来たらせたまえ。

アアメン，主イエスよ，来たりませ。平和の主イエスよ，来たりませ。

2002年11月15日　日本バプテスト連盟第49回定期総会

[redacted]